14 th ICFIA 2007 報告記

株式会社小川商会　樋口慶郎

FIA の連中はよくやるよ！

「毎年のように海外に出かけて FIA の連中はよくやるよ！」という感想を他の研究懇談会の人たちは持つに違いない。「よくやるよ！」というフレーズには，「アクティブに良く頑張ってるね（うらやましい）」という好評価と，一方では，いわゆる「懲りもせずによくやる」という気持ち（悪意ではないことを願う）も込められていることは容易に想像がつく。それはごもっともかもしれないと筆者は思うのである。FIA に直接関係した国際会議は現在 2 つある。Flow Analysis と International Conference on Flow Injection Analysis(ICFIA)の 2 つが各々数年おきに開催されている。両方に参加していると必然的になんだか毎年どこかに出かけているように見えるのである。昨年は Flow Analysis がポルトガル，それに引き続き今年は 14th ICFIA 2007 がドイツベルリンというわけである。

今年の場合の特異な点は，この会議の前後に非常にタイトなスケジュールを従えての参加にあった。このことに，まず我々FIA 研究懇談会の人たちの人並み外れた気力と体力を感じずにはいられない。出発前の 8 月 29 日（水）から 31 日（金）までの 3 日間，千葉県幕張で分析展及び東京カンファレンス 2007 が開催され，FIA 研究懇談会は東京カンファレンスの公式事業として 29 日午後，30 名以上の参加者を集め FIA 講習会を行った。この講習会では酒井委員長，本水，小熊，手嶋先生が講演と実習を受け持ってくれた。筆者も含め全員がベルリンを目前にしての仕事であった。特に手嶋先生は，お忙しい中，要旨集の作成から実習設備・薬品の調達など一手に引き受けていただいた。ICFIA は 9 月 2 日（日）から始まるため，先生方の日程が，いかにタイトであったか，もしかしたら家に戻って荷物を積み替えて，飛行機に飛び乗るという離れ業だったのかもしれない。先生方，本当にご苦労様でした。また，帰国してすぐの 9 月 19 日～21 日は徳島大学で日本分析化学会年会という大行事を控えていた。「よくやるよ！」の示す現実はここにある。

ともあれ，ICFIA 2007 は 2007 年 9 月 2 日から 7 日まで，ドイツベルリンにあるベルリン工科大学に約 120 名の FIA 研究者が集まり開催された。紙面の都合上（?），この報告記はいつものように道中記とさせていただき，ICFIA の日程や学術的内容について興味や質問をお持ちの方は筆者もしくは参加した先生方までお問い合わせください。

日本からの参加者は以下の方々です（敬称略）。酒井忠雄委員長（愛知工大），本水昌二（岡山大），小熊幸一（千葉大），善木道雄（岡山理大），佐藤生男

（神奈川工大），今任稔彦（九州大），板橋英之（群馬大），長岡勉（大阪府大），戸田敬（熊本大），塚越一彦（同志社大），田中秀治（徳島大），手嶋紀雄（愛知工大），椎木弘（大阪府大），大平慎一（テキサス大），平田静子（産総研），中島惇一（日産化学），そして筆者と他同伴者３名の総勢20名。

問題がないのが一番

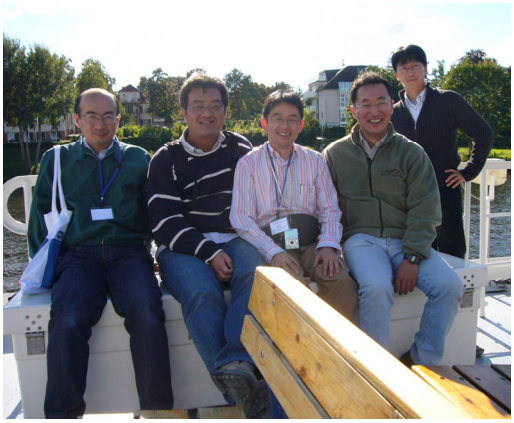
少々の驚きやトラブルがあった方が読者にとっても，筆者にとっても道中記が面白くなるのは明らかであり，担当するレポーターもそんな期待を込めて日常を見守るのである。これまで筆者も何度か道中記を書くチャンスをもらったが，良くも悪くもそれなりにトピックスはあった。しかし，正直，今回の旅では全体を通してトラブルもなく，大きな驚きもない実に平穏な道中であった。従って，あまり面白くない道中記になってしまうことを最初にお断りしておく。万事トラブルなく無事に仕事を終え，日本に帰ってくること，これがまず基本であり，それを読者のみなさんにお伝えすることが筆者の役目，結論としてはやっぱり，「問題がないのが一番」である。

「やっぱりこうじゃないと気分が出ない」

筆者が国際会議に参加し始めたころに，感動し，勉強させてもらったのが「真夜中のミーティング」（もちろん非公式である）であった。一日の講演・聴講・行事を終え，ホテルに戻った後，団長部屋に集合し，日本から持ち寄ったアルコールやつまみを開き，ミーティングが始まるのである。話題は研究から私生活まで多岐にわたり，かつ非常に示唆に富む内容が多く，時として帰国してからの学会や講習会などの行事の日程や内容，担当までその場で決まってしまうことまであるので要注意である。そしてこのミーティングは連日連夜続くのであった。筆者はそれに参加することが，国際会議に参加する裏の（？）一番の目的であった。最近は諸事情により残念ながら以前のようなミーティングを開くことが難しくなっているが，今回もホテルの近くにやっとスーパーマーケットを見つけたときは，しめたと思った。早速，ビールや地元の食材（特にあやしいものは歓迎），寿司に野菜などなどを買い集め，部屋に持ち帰り，スーツケースを食卓に追加して，リラックスした服装で小規模なミーティングを数度開催した。「やっぱりこうじゃないと気分が出ない」とおっしゃられた酒井委員長のお言葉に大いに納得しつつディスカッションに花が咲いた。今後も真夜中のミーティングは続けていきたいものである。これから国際会議に参加されようとお考えの特に若いみなさん，是非参加することをお忘れなく。

Japanese Session について

会議の内容についても一つだけ触れたい。主催者の真意のほどは定かでないが，９月６日午前中に Special Session として，“FIA/SIA Development in Japan”が企画されていた。公式見学会（ポツダム観光）の翌日午前中のセッションであり，聴衆の



集まり具合が心配されたが，「そんなの関係ない」ほど多数の人が着席してくれていたのには安心すると同時に，世界中のFIA研究者の多くが日本の動向に注目していることを改めて認識した。Session でははじめにFIAの創始者のひとりであるHansen（デンマーク）から，日本のFIAのアクティビティーやJAFIA の紹介があり，引き続き Hansen を Chairman に板橋，小熊，長岡，田中，手嶋，本水先生（講演順）により日本における最新のFIA研究のいくつかが紹介された。今のFIA国際会議はパワーと実績の観点からも，日本を外しては考えられないと筆者はつくづく思う。この Session の講演以外でも，前述の先生方により日本発の技術が発表されていたことを併せてお伝えする。

コスト高なヨーロッパ

1ドル＝1ユーロ＝100円の感覚が身についてしまっているのは筆者だけであろうか。確かにそれは一昔前の良き時代か。前回のFlow Analysis Xの時，ポルトガルに入る前にトランジットの都合でパリに1泊したときのこと，このままいったらいくら金を使ってしまうのだろうかと正直，心配になるほど金が出ていく感覚に襲われた。その後，ポルトガルに移動して物価そのものの安さに一安心したのが記憶に新しいが，今回のベルリンも何かにつけ実質的なコスト高を実感した（参考までに今回は1ユーロ＝約160円のレートであった）。ポストカンファレンスで訪れたチェコでビールがベルリンに比べ1/5くらいの値段であると気がついたときは，つい大船に乗った気分で飲んでしまった。それでも実質的には8年前の2倍以上のコスト高なのであった。少々「せこい話」になってしまったことをお許しいただきたい。国際会議に参加することで世界各国の時代の移り変わりをこんなにも身近に感じられることも素晴らしいことではないか。

プラハはとてもなつかしく

9月7日午前中でICFIAは公式の日程を無事終了した。この後，一部の先生方と筆者は，チャールズ大学のProf. PolasekとProf. Solichの案内でチェコプラハに移動した。プラハは1999年に10th ICFIAが開催された場所で，筆者にとっては当時初めてのヨーロッパということもあり，見るもの食するものすべてが新鮮に感じ，もう一度行ってみたいと願っていたところに今回の旅であった。ベルリンからプラハまでは列車での移動であった。今は同じユーロ圏でフリーパスかと思いきや，ドイツの出国，チェコへの入国の度ごとに車中でパスポートにスタンプが押されたのは，小さな感動であった。プラハの宿は1999年に利用したと同じくクリスタルホテル（一部の方には記憶に残るホテルであると思う）であった。到着したのが夜であったにもかかわらず，ホテル近辺の景色やにおいを思い起こすことができて，妙に懐かしさを覚えた。懐かしさと言えば，前回の

報告記（板橋先生著）で有名になった世界各国の独裁者の写真を掲げたプラハ市内のレストランをどうしても訪れてみたくなり，近くまで行ってみたが，ちがう店に変わってしまっていた。みんなで残念な気持ちになってしまったが，それだけあの店は全員にとってインパクトが強かったのだと改めて思い出されて，これもなつかしく感じてしまった。

8 日にはプラハから車で 2 時間ほど走ったところにあるチャールズ大学薬学部に移動して，午前中ポストシンポジウムを薬学部の学生を交えて行った。その後両教授の研究室を訪問した。20 年以上前に Prof. Solich により自作された FIA 装置や新旧含めた SIA 装置が 5 セット稼働していた。実験室はどこも整然と装置が配置され，きれいに使われている様子がうかがえた。お二人の先生方の細やかで温かい心遣いに触れ，また，いつか訪ねてみたいと思った。

おわりに

今回の ICFIA では，予算も含めた会議の運営そのものに若干の疑問を抱いたのは筆者だけではないと思う。次回の 15th ICFIA は 2008 年 9 月 28 日から 10 月 3 日まで名古屋で開催されることが正式に承認された。運営上のいろいろな改善点はもちろんのこと，これまでタイやチェコなど外国の人々から受けた温かいホスピタリティーを良い手本に，さすが日本にきて良かったと思ってもらえるような「もてなし」と，実りある学会にするべく，準備が進められることと思う。筆者もこれまでの体験を生かして，少しでも役に立てるように協力するつもりである。本会会員のみなさんもたくさんご参加いただけることを期待している。